

公益の風 #36



東北公益文科大学 教授

梅津 千恵子

今年4月から新任教員として公益大へ赴任しJターンを果たした。高校卒業とともに庄内を離れてからずいぶん時が経ったが月山と鳥海山の美しさと庄内の人達の温かさはそのままである。最初に出席した国際交流委員会で公益大がカナダの太平洋岸にあるビクトリア大学と国際交流協定を締結していることを知り、新渡戸稲造とこれで3度出会ったと感じた。

私は1987年に新潟県南魚沼市にある国際大学国際関係学研究所へ入学することになった。1980年に青年海外協力隊員として2年間ケニアの中学校で理科教師のボランティア活動に従事したのちに、現在の国際協力機構(JICA)

新渡戸稲造に3度出会う

東北支部で途上国から来る技術研修員の研修コーディネーターをしていたが、JICAの会議で後に指導教員となる犬飼一郎先生に出会い、国際大学の門を叩いた。学部では生物学を専攻したが、協力隊での活動経験から大学院では途上国の貧困削減を考える開発経済学を志した。在学中にワシントンD.C.にあるジョンズホプキンス大学高等国際問題研究大学院(SAIS)へ1学期の交換留学をする機会を得た時に、日本研究グループ主催の歓迎レセプションで日本からの留学生へ記念品が贈られた。その前面には明治・大正期に活躍し国際連盟事務次長に就任した新渡戸稲造の言葉「願はくは我れ太平洋の橋とならん」が刻まれている。新渡戸は明治17年(1884)にジョンズホプキンス大学へ留学する。それは彼の入学100周年を記念して作成されたものだった。これが最初の出会いである。

国際大学の修士課程を修了した私は幸いにもイーストウエストセンターからの奨学金を得て、そのままハワイ大学の博士課程へと進学した。専攻は農業資源経済学で農業の生産資源の適切な利用のための経済学的評価を学んだ。ハワイ大

の院生には途上国でボランティア活動をしたアメリカ平和部隊(Peace Corps)経験者が多かったのも心強かった。日本に戻った後は、農業経済学や環境資源経済学という分野が日本においてどの様に発展してきたのかに興味を持った。その中で、明治32年(1899)に日本で最初に農業経済学博士号を授与されたのが新渡戸稲造であったことを知った。新渡戸はインターネットなどもない時代に世界各地の情報を集約して「農業本論」を著し、また日本における協同組合の設立にも尽力した。これが二度目の出会いである。

冒頭にも述べたが、公益大へ赴任して最初の国際交流委員会がビクトリア大学との学生交流のプログラムがあることを知って大変驚いた。公益大で新渡戸稲造に3度目

の出会いを果たした様な気がした。新渡戸は国際情勢が日増しに緊張を増し日本が戦争へと突入して行く中、民間の国際研究機関である太平洋問題調査会の活動に尽力していたが、昭和8年(1933)にカナダのバンフで開催された第5回太平洋会議で体調を崩し、その2か月後にビクトリアの病院で逝去したのであった。彼は環太平洋地域の緊張関係を相互理解による民間の力で解決することに尽力していたのであったが、公益をグローバルモンスとして追及していたのである。大学教育の使命のひとつは地域と外をつないで、ローカルとグローバルの「架け橋」となり広い視野で公益に貢献できる人材を育成することである。若い学生の皆さんにはぜひ新渡戸稲造の意志を引き継いでいただきたいと願う。



新渡戸稲造留学100周年を記念してジョンズホプキンス大学が作成したペーパーウェイト